

最後の舞台装置の中のゴーガン



その舞台装置デコレーション、それはあのような末期の苦しみに相応しく、豪華な葬儀の舞台装置だった。それは壮麗で  
もの悲しく、どことなく奇妙で、あの流浪の人生の遠方での終幕を解き明かし注釈するとともに、それを的確な  
印象で取り囲んでいた。だが、ゴーガンの強烈な人格の方も、その反映によって、自ら選んだ環境、最  
後の地と定めた滞在地を輝かせ、満たし、それに生命を与え、そこから溢れ出している。それゆえ、一つの  
同じ舞台作品（二）の視覚の中で、主役の彼と、その脇役である原住民、そしてそれらを取り巻く舞台装置とを理  
解することができるのである。

§

ゴーガンは怪物だった。つまり、大半の個人を定義するのに十分な、道徳的、知的、あるいは社会的な範

疇のどれにも、彼を入れることはできないということだ。一般の大衆にとつて、判断するとは、ラベルを貼ることである。人は、尊敬すべき仲買人、廉潔な司法官、才能ある画家、正直な貧乏人、育ちのよい娘であることはできる。「芸術家」、さらには「偉大な芸術家」にさえなることもできる。だが、それはすでに誰でもなれるわけではなく、そのどれでもない他のものであることは許されない。というのも、分類しようとしても、それに必要な型通りの表現がないからである。ゴーガンはそれゆえ怪物だった。完全に、有無を言わせぬやり方で怪物だったのである。ある種の人間は、一つの意味においてのみ例外的であり、彼らの活力の全体は、一本の軸の周りに渦巻いているように見える。しかし、それ以外のこと、その日常生活（家計、儀礼的訪問、義務の感情）については、彼らは市民であり、正常な人間でありうる。それは気質の問題、身体的態度の問題であり、並外れた才能を持つ作家が、痩せた教会の番人のような肉体をまとうていることもある。天才は、尊敬すべき品位ある外見や、几帳面な商人の生活を、少しも排除しないのである。だが、ゴーガンには、そのような点もまた、まったくなかった。彼は、その晩年に、愛情に満ちているとともに恩知らずな、矛盾に満ちた苦しめる存在として現れた。弱い者たちに対しては、彼らの意志に反してまでも、好んで世話をしやうとした。尊大ではあったが、人間の下の審判と罰に対しては子供のように傷つきやすく、素朴で荒削りな人間だった。彼は多様で、しかも、全体として極端な人間だった。

§

芸術家から住居へと眼を移しても、その住居の方も芸術家の舞台上での身振りにすぎない。それは控え目

な、慎ましい身振りであり、すばらしい自然の装飾の中に、それと調和した節度ある筆遣いで描かれている。葉の付いた枝を結わえた赤褐色の屋根は、二つの長い斜面となり、これもまた植物を編んで作られた黄色い壁に落ちかかり、周囲のどんな部分ともぶつからず、その土地の資源からごく自然に迸り出た、頑丈な生の骨組みによって、草の茂った地面に繋がれている。地面より高い所に据えられた木の床に上る短い階段の向いに、素朴な小さな小屋があり、その中には、乾燥して、雨でぼろぼろになつた粘土の模像が納められている。そこで、足を止めるのがよい。というのも、それは神の像で、古い習わしでは、そこで〈異国の者の祈り〉をすることが勧められているからだ。

わたしは足下の地も知らぬこの場所に到着する。

わたしは頭上の空も新しきこの場所に到着する。

わたしはこの場所に到着し、そこがわたしの住いとなることだろう……。

おお、大地の〈霊〉よ、〈異国の者〉が、あなたのための食べ物として、ここにその心臓を差し出す。<sup>(二)</sup>

まさにこれこそ、過ぎ去りし日々の、形の定かならぬアトウア〔タヒティ語で「神」〕を形象化したものである。しかし、芸術家のさまざまな解釈の夢想から生まれたその像は、奇妙なほど雑多な要素でできている。姿勢は仏陀のものだが、唇は逞しく、両眼は切れ長の細い眼ではなく、突き出て、中央に寄り、鼻はまっすぐで、鼻孔のところわずかに広がるだけで、すべてが原住民の特徴を示している。それはマオリの国に生まれたかもしれない仏陀である。ゴーガンはこのように、ポリネシア神話の英雄たちに、多種多様な宗教的伝統の

形式から借りた姿態を取らせて楽しんだ。その点において、この像はただ彼だけに属するものだった。なぜなら、その人々は、自分たちの神を形にすることを潔しとしなかったからだ。彼らは、木を加工したり、溶岩や赤い砂岩をじかに彫って、巨大な像を作ったりする技術を知らなかったわけではないが、そうした技術を用いて彼らが作ったのは、象徴や聖櫃や墓に飾る像にすぎなかった。マルキーズ諸島のティキ〔マルキーズ語で「彫像」・「タヒテ」の「ティキ」は、崇拜されるのではなく、とりわけ土地の境界を司り、せいぜい下位の神々を装っていたにすぎない。異教徒だったのはただ宣教師たちだけで、彼らは原住民が神人同形論者だと思いが、その原住民に「木でできた神々」を崇めないよう説いていたのである。だが、創造神タンガロアは、ヤハウエのように、決して偶像を持ったことはなく、ただ櫃や聖櫃で表されていただけだ。

小像の下には、ゴーガン自身の手によって題字と詩句が書かれていた。

## テ・アトウア

神々は死に、そしてアトウアは神々の死によって死ぬ。

かつてアトウアナ〔三〕を燃え上がらせていた太陽は、今、アトウアナを眠らせる、

何度かの短い夢の目覚めをともなった、悲しい眠りで。

あの時の悔恨の木がイヴの眼の中に現れ始め、

イヴは物思いに耽って、自分の乳房を見つめて微笑む、

神の思し召しによって固く閉ざされた不毛の金の乳房を……。